

誰もが知りたい

ローザンヌ宣教シリーズ

No. 11

伝道と新宗教



*Let
the Earth hear
His Voice*

**Lausanne
Occasional
Papers**

No. 11
Thailand Report-

Christian Witness to New Religious Movements

Lausanne Committee for World Evangelization

関西ミッション・リサーチ・センター/日本福音同盟

誰もが知りたい

ローザンヌ宣教シリーズ

No. 11

伝道と新宗教

ローザンヌ宣教シリーズ

邦訳出版の経過

1974年7月、景勝の地、スイスのレマン湖畔ローザンヌで開かれた世界宣教国際会議（ICOWE）は、まさに、近代における宣教の歴史にとって、画期的な意義深い会議となりました。

勿論、世界150カ国から、約4,000人近いキリスト教指導者達が集まって、10日間にわたり、祈りのうちに、宣教大命令について、共に考え、学び、論じ合ったということだけでも、実に特筆すべき事柄であったと思います。

しかし、そこにとどまらず、この会議の後、継続委員会——現在では、それが発展して、70名に及ぶ委員によって構成されるローザンヌ世界宣教委員会（LCWE）となっている——が設置され、今日まで、10年間にわたって、世界宣教や伝道の諸問題を、あらゆる角度から、深く掘り下げ、それぞれ、神学、戦略、コミュニケーション、禱告という分野において、その活動を継続的に推進してきているということは、大いに評価されなければならないことであります。

かく云う筆者も、過去6年間、この委員会の末席を汚させていただき、実行委員の1人としてご奉仕させていただいたのでありますが、LCWEは、特定の団体や組織や教派にかたよらず、あらゆる福音主義者を結集して、世界大の宣教のわざにあずからせることを目的に、今日までその運動を展開してきました。そのよって立つところの信仰的基準は「ローザンヌ誓約」です。これは、世界における福音宣教ということを、単に垂直的にとらえるだけでなく、文化及び社会を、巾広く、グローバルにとらえながら、全人的な救いということを宣教論的に志向している、現代の福音主義の立場を代表しているものです。

具体的にどのような活動が展開されてきたのかと云いますと、国や地域毎に開かれた伝道会議、特定のテーマをかかげて開かれた研究協議会（コンサルテ

ーション)、さらには、種々の大会などをあげることが出来ます。LCWEでは、こうした会議や会合の成果を、出来るだけ広く、そして草の根レベルの教会や信徒にまで及ぶようにと、ローザンヌ宣教シリーズ(LOP)と銘打って、現在まで24冊に及ぶ報告書を出版してきました。

早くから、英文で出されたこのシリーズの邦訳をと願いつつも、仲々その機会を見出せずにいたところ、関西ミッション・リサーチ・センターの前理事長服部嘉明先生と理事の先生方のご理解とご支援をいただき、また日本福音同盟の全面的な協力を得て日本語で紹介することが出来るようになり、既にそのうち何冊かが出版されております。私達は、このような有意義な企画が、愛する祖国、日本の諸教会に連なる多くの教職・信徒の方々にとって、時宜を得た、しかも大いに有益なものであることを確信いたしまして、今後も、残りのシリーズの出版に鋭意努力していく所存であります。

もとより、関西ミッション・リサーチ・センター(KMRC)は、その創設当初より、日本という文化と社会の中にありながら、世界的な視野を持った福音主義の宣教研究所として存続してきており、このシリーズの出版だけをもって事足れりとしているわけではありません。しかし、その活動の一環として、この事業を手がけることが出来たことを、主に心から感謝するものです。

どうか「誰もが知りたい」この宣教シリーズを、よくお読み下さり、また宣教に重荷と関心を持つ教友に是非お勧め下さい。

終わりに、このシリーズの邦訳及び出版権を許可して下さったローザンヌ世界宣教委員会と、このシリーズの出版に全面的に協力して下さった日本福音同盟、また側面から支援して下さったノールウェー・ルーテル伝道会に心から感謝の意を表わします。

1984年7月6日

関西ミッション・リサーチ・センター(KMRC)

理事長 古 山 洋 右

新宗教運動へのキリスト者の証し

目 次

序 文	1
1. 新宗教運動の種々相―“種”とその“土壌”	4
a. キビンバンク教	4
b. デヒマ教―サハラ砂漠以南	5
c. 創価学会―日本	8
d. ウンパンダ教―ブラジル	9
e. 奇跡の道 (Course in Miracles)―アメリカ	11
f. AAO―ドイツ、オーストリア、スイス	13
g. 統一教会―英国	15
h. カーゴ・カルツ (Cargo Cults) ―バプア・ニューギニア	17
2. 新宗教運動の底にある諸要因	19
a. 宗教的欲求	19
b. 集団への欲求	21
c. 権威への欲求	24
d. 超経験への欲求	26
e. 生活の全てに関わるような宗教への欲求	30
3. 彼らの告発	34
a. キリスト教会に対して	34
b. キリスト教の宣教活動に対して	36

4. 彼らの救済と養育と矯正	38
a. 新宗教運動に対する我らの備え (apologetic)	38
(i) 批判と神学的挑戦	38
(ii) 霊的戦い	42
(iii) 識別力の必要性	43
(iv) 社会的、政治的、法的行動	44
(v) 教会に対する警鐘	47
(vi) 相対主義への対応：解放への鍵	47
b. カウンセリングの準備	49
c. 救済と養育	51
d. 矯 正	55
e. 異端より改心した人の証し	59
5. 結 論	68

序 文

世界中に見られる宗教的興奮の高まりの中で、幾多の新宗教運動が勃興しつつある。その中には、古い宗教の、死にかけたような燃え残りが突然新たな炎を吹き出したものもあり、またそれが偶然にせよ、意識的にせよ、宗教的「種」が海のこちら側から向う側に移植されたようなものもある。到る所で、いくつもの宗教からの特色が考え得る限りの組み合わせで混ぜ合わされ、溶け合い、かきまぜられ、つぎ合わされ、そして一つの新らしいものにまとめ上げられてる。政治とか心理療法というような宗教色のない分野までが「宗教的な」集団を生み出している。これらは一体何を意味しているのだろうか。

多くの人たちが、これら幾多の新宗教運動の成長の中に、人々の深い霊的飢餓のゆえであるという希望の徴を見ている。キリスト教会は、聖霊とみ言に導かれている教会ならば、それらの新宗教にまきこまれていた家族や友人たちを、全き悔い改めとキリストに在る新らしい生活に導くために力になれるであろう。そこには決して見逃してはならないよい機会となる要素のあることも事実である。

他方、また多くの人たちが、混淆宗教のこのような出現は、終りの日には多くのにせ預言者たちが興るであろうというイエス・キリストの御警告の光の中で理解すべき、新らしいサタンの攻撃の現れであると考えている。すなわち、「にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。」（マタイ 24:24、新改訳）

どちらの見方も正しい。それらの中には、疑いもなく悪魔的起源を持つ幾多の集団がある。しかし、感謝すべきことに、その折衷的性質にもかかわ

らず、その中に神の霊が働いている幾多の新教会運動があることも事実である。どこまでが前者で、どこからが後者であるかを識別する眼はただ神のみが与えるものである。

この小冊子は、世界の各地から集った17人の者たちが、16時間半（と、まとめと清者のための数晩）をかけて討議した、彼らの貢献と洞察にもとずいた、ほんの手始めの一つの報告書にすぎない。我々は、それが我々に与えられた務めであるゆえに、このような不完全な形のままではあるが、発表することとした。我々は理解しようと、祈りと断食の中で、精神的にも肉体的にも懸命の苦闘をした。我々は、我々が経験したその一片でも表現しようと努めたが、大きな氷山の一角を現わすことができたにすぎない。我々は、我々の経験がほんの限られたものにしかすぎないということをよく知っている。この報告者は決して唯一の答えなどではない。いいところ、ほんの手始めにしかすぎない。現在起りつつあることを完全に理解するためには、世界の各地での、多くの神の民による長年に亘る真剣な研究が必要であろう。しかしながら、この不備な研究が世界のキリスト教会にこれらの新宗教運動を知らしめ、それらの運動の意味するところを理解しようという思いを起さしめ、神の御霊に導かれて、彼らに対するキリスト者としての責任を全うせしめるようにというのが我々の祈りである。

調査対象となった集団の類型は以下の通りである。

- 一圧倒的にキリスト教的地盤に起っている新宗教運動。
- 一キリスト教的地盤に東洋から輸入されて起っている新宗教運動。
- 一古来の宗教的な土地柄に起っている新宗教運動。
- 一宗教的な含みを持った心理的自己実現運動。
- 一異常なキリスト教的集団。
- 一非キリスト教的な宗教基盤にキリスト教的要素を加えたもの。

—キリスト教的基盤に非キリスト教的要素を加えたもの。

—一応キリスト教的路線の中で起っているが逸脱した教理的解釈に立っているもの。